

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	言語学における抽象化
Author(s)	荒木, 直樹
Citation	ニダバ , 24 : 155 - 164
Issue Date	1995-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047967
Right	
Relation	



言語学における抽象化

荒木直樹

はじめに

言語学の対象とは何か。ソシュールはこれを非常に難しい問題であるが解決策は一つしかないと言う。それはラング(langue)を言語現象の規範とすることだと述べている。ソシュールによれば、ラングとは多様で混質的な言語現象から独立して研究することのできる等質的な対象である。そして、言語学はラング以外のものを排除したときでなければ、成立しないと言う。¹つまり、ソシュールの言うラングとは現実の言語現象から抽象されたものなのである。

こうしてソシュールは、ラングを言語学の対象として定立した。しかし、このような方法論に問題はなかったのであろうか。先ず、ラングに対する批判をミハイル・バフチンと時枝誠記に見てみよう。

1 バフチンの抽象的客観論に対する批判

ミハイル・バフチンは『マルクス主義と言語哲学』の中でソシュール言語学を「抽象的客観論」と呼んでいる。勿論、バフチンが取り上げているソシュール言語学は、ソシュールの死後、バイイとセシュエが編集した『一般言語学講義』に基づくものである。現在では、この『一般言語学講義』はソシュールの真意を伝えていないのではないかという指摘があるが、仮にそうであったとしても、この書物は現代の言語学を基礎づけたと言っても過言ではない。従って、バフチンの言う「抽象的客観論」とは現在、言語学で支配的なパラダイムと言うことが出来るだろう。

さて、バフチンは、この「抽象的客観論」の特徴を幾つか述べているのであるが、ここで問題となるのは言語がどのようなものとして捉えられているかである。バフチンによれば「抽象的客観論」は言語を「規範的に自己同一的な言語諸形態の体系」とみなしている。つまり、言語体系はいかなる個人意識に対しても外的な客観的事実であり、個人意識から独立していると言うのである。この意味で「抽象的客観論」は実体化しているとバフチン

は言う。そして、次のように述べている。

共時的言語体系は、歴史上の任意の瞬間に所与の言語グループに属している話し手の主観的意識から見てのみ存在している。・・・客観的観点からは、それは歴史上のいかなる現実の瞬間にも存在しない。たとえば、執筆しているシーザーにとってラテン語は自己同一的規範の不変不可侵の体系であるが、ラテン語史家にとっては——シーザーが執筆しているそのおなじ瞬間に——（歴史家はそれらの変化をただしく定めることができないにしても）言語変化の絶えまなき過程が進行していた、ということになる。²

つまり、「抽象的客観論」の主張する、客観的で自己同一的な規範である言語体系は、所与の言語の話し手の主観的意識に対してのみ存在するのであり、このような主観的意識を無視し、客観的観点から言語を眺めれば、そこには、絶え間なき生成の流れがあるだけで共時的な言語体系がうちたてられるような現実の瞬間は存在しないのである。

ここでバフチンは、言語体系が人間とは独立に存在する客観的なものではなく、人間の主観にのみ実在するものだと考えている。

次にバフチンは、「言語が話し手の主観的意識にとって議論の余地なき規範的に同一な諸形態の客観的体系として存在するというのはほんとうなのか」と問い、次のように述べるのである。

話し手の主観的意識は、規範的に同一な諸形態の体系としての言語とともにたらくわけではない。このような体系は、膨大な努力や一定の認知的・実践的志向をもって得られる抽象化にすぎない。言語体系とは、言語にたいする反省の所産である。そういった反省は、所与の言語の話し手本人が話すためにおこなうわけではけっしてない。³

バフチンにとって話し手および聞き手（了解者）の言語意識が、生きたことばの実際の活動の中にかかわっているのは、規範的に同一な言語形態の抽象的体系などではなく、所与の言語形態の使用が可能なコンテキストの総計という意味での言語＝ことばなのである。例えば、母語の話し手にとって語があらわれるのは、語彙の項目としてではなく、その言語共同体のおなじ成員A、成員B、成員C等によってさまざまな発話の中で用いられる語としてであり、自分自身の様々な発話の中で用いられる語としてである。従って、ここから所与の言語の語彙体系の自己同一的な語——辞書の中の語——に到達するためには、極めて特殊な独自の志向が必要であるということになるとバフチンは述べている。

バフチンの言うように所与の言語の話し手、および聞き手の主観的意識に言語体系が存在しないとすれば、それはその言語を研究している者の主観的意識にのみ存在するということにならざるを得ない。そしてその所与の言語を研究している者の主観的意識に実在す

る言語体系とは抽象化によって得られるものだけということである。

2 時枝誠記のラングに対する批判

次に時枝誠記がバフチンと同じようにバイイ、セシュエの編集したソシュールの『一般言語学講義』を批判しているのを見てみよう。

時枝誠記によれば、ソシュールは多様であり、混質的である言語活動の中にそれ自身一体なるべき単位要素を求め、それを「ラング」であるとしていると言う。そして次のように述べている。

かくして単一単位を求めようとする彼（ソシュール）の態度には、明かに、科学の出発点は単位の認識から始められねばならないという考が存することを知るのである。この意図は、既に対象の考察以前に於いて、対象に対して自然科学的な原子的構成観を以て臨んでいることを示すものである。我々の具体的な対象は、精神物理的過程現象であるにも拘わらず、それをそれとして把握せずして、混質的であることを理由として、他に等質的な単位要素を求めようとすることは、明かに対象よりの逃避であり、方法を以て対象を限定したことになるといわなければならないのである。具体的な対象を限定して、その中に自己の要求する処のそれ自身一体なるべき「言語」を学の対象として定立し得ても、それは具体的な言語経験自体の考察を意味しないことは明かである。我々の学問の目的は、具体的な言語経験それ自体が如何なるものであるかを尋ねようとしているのである。自然科学の見出した処の究極不可分の単位である原子は、自然科学的对象の構造形式に規定された必然的結論であるが、同様なことが言語の場合にも適用出来るかどうかそれは疑問である。⁴

時枝誠記がここで繰り返し述べていることは、言語研究の対象とは多様で混質的な、具体的な言語経験それ自体であり、そこから等質的な単位要素として「ラング」を引き出すことは、対象を考察する以前に、その対象に対して自然科学的な原子的構成観を適用しているということである。そして「ラング」は心的なものとして考えられているけれども、その存在の形式は自然科学的对象と何等拮ぶ処がなく、人間の精神中に座を占めている自然物であり、主体を離れた存在であると指摘している。

ここで時枝誠記は、ソシュールの「ラング」が自然科学の対象と同じように客観的に存在することを否定している。時枝誠記によれば、言語研究の具体的な対象とは具体的な言語経験それ自体であり、それは精神物理的過程現象なのである。

3 言語学における抽象化

バフチンも時枝誠記も言語学における抽象化の方法論を批判している。バフチンによれば、言語体系は言語学者が言語を研究する時、抽象化によってその主観的意識に得られるものである。また、時枝誠記は、言語活動から「ラング」を取り出し、研究対象にすることは、言語を自然科学の対象のように客体化する方法論であるという。

これに対して、現代の言語学は、このような抽象化を科学の方法論として妥当であると主張している。例えばチョムスキーは、次のように述べている。

Linguistic theory is concerned primarily with an ideal speaker-listener, in a completely homogeneous speech-community, who knows its language perfectly and is unaffected by such grammatically irrelevant conditions as memory limitations, distractions, shifts of attention and interest, and errors (random or characteristic) in applying his knowledge of the language in actual performance. This seems to me to have been the position of the founders of modern general linguistics, and no cogent reason for modifying it has been offered. ⁵

現実には勿論、「完全に均質な言語共同体」も「理念上の話者・聴者」も存在しない。我々が経験する社会は言語の面から見れば極めて混質的である。これはすでにソシュールが認めていたことでもある。また、我々は母国語でさえ、完全には知らないし、その母国語を使う時には様々な影響を受けるのが普通である。チョムスキーもこのようなことは承知の上で、「完全に均質な言語共同体」や「理念上の話者・聴者」を言語学の対象にしている。これはひとつの抽象化である。そして、このような抽象化は、言語学のみならず、他の科学においても研究の対象を確定する際、行われているとチョムスキーは言う。

In other scientific approaches, the same assumption [i. e., the idealization] enters in one or another form, explicitly or tacitly, in identification of the object of inquiry. ⁶

また、チョムスキーはこのような抽象化を採用しなければ、我々はただ、資料を収集し、整理するだけの博物学で満足しなければならないだろうとも述べている。

Any serious study will, furthermore, abstract away from variation tenatively regarded as insignificant and from external interference

dismissed as irrelevant at a given stage of inquiry. Such steps [i. e., idealizations] may eventually prove to have been misguided, but the only alternative is a form of natural history, tabulation and arrangement of facts, hardly a very serious pursuit however engaging the data.

There is no reason to abandon the general approach [i. e., the idealization] of the natural sciences when we turn to the study of human beings and society. ⁷

そして、抽象化によって得られた結果を基にして、我々は現実の複雑な現象を説明できるようになるのだと考えている。⁸

On the contrary, what is implicitly claimed by someone who adopts the idealization is that these further questions [i. e., matters that do not fall within this idealization, such as linguistic variation and so on] are properly studied within a framework that makes use of the results obtained by inquiring into the idealization. If the idealization does make it possible to unearth real and significant properties of the language faculty, this conclusion would seem to be justified, indeed inescapable. ⁹

4 抽象化という虚構

では、現象を分析し、抽象化する方法論それ自体には問題がないのであろうか。例えば、化学では我々が経験する「水」を H_2O という化学式で捉えている。水は水素と酸素の化合物であるといわれている。ところが、我々が経験する水はそれぞれ異なっており、また、全く不純物を含まない「純粋な水」を観察することは出来ない。化学は、このような水から抽象によって H_2O という物質を仮構しているのである。当然のことながら、現実の世界には H_2O に対応しているもの、あるいはもっと正確に言えば、 H_2O そのものは存在しない。ヘラクレイトスの言う通り、この世界に在るものは全て、絶え間なく変化している。¹⁰従って、 H_2O のような不変の実体というものはあり得ない。このように考えると自然科学における抽象化という方法論は、ひとつの虚構としてしか成り立たない。そうすると科学の方法論にその妥当性を求める、言語学の抽象化という方法論もまた、ひとつの虚構としてしか成り立たないことになるのではないだろうか。

これは結局のところ認識論の問題である。プラトンは世界が変化していることを認めた上で、何故、人間は世界を認識できるのかをイデア論によって説明した。つまり、人間は不変のイデアを知っているので、世界を認識できると考えたのである。

それでは、われわれは同意することになるのではないか。いまひとが或るものを見て、こういうことに思い及んだとするのだ。「自分が現に見ているこのもの（個物）は、なにか存在する別のもの（アイデア）のあり方と、おなじような仕方でありたいともどめているけれども、しかし及ばないところがあって、かのもの（アイデア）のあるように、そのようにあることはできず、それより劣ったものでしかないのだ」と。さて、もしひとがそのことに思い及んだとしたら、そのひとは、そのかのもの（アイデア）を——つまりこのもの（個物）がそれ（アイデア）と似ているが、しかし及ばないところがあると言うそのもの（アイデア）を——それ以前にどこかで知っていたことが、必然となるのではないか。¹¹

例えば、ある机を見て、それが机であると分かるのは、机のアイデア（普遍的な机）を知っているからだと言つてプラトンは言うのである。我々が「何か」を「あるもの」として認識するということは、「あるもの」と「何か」との同一性を認知したことである。言い換えるならば、不変のもの（プラトンの言うアイデア）によって、変化するもの（プラトンの言う個物）を捉えるということである。ところで外界は一瞬もとどまることなく変化しているのであるから、「不変のもの」は外界には存在しない。ではどこにあるのだろうか。外界にないとするれば、それは我々の内にある、つまり、頭の中にあるとしか考えようがない。我々は頭の中にある「不変のもの」によって外界の変化しているものを把握しているということになるのである。それでは頭の中にある「不変のもの」とは何であらうか。我々が言葉によって、外界のものを捉えていることから明らかなように、この「不変のもの」とは言葉であるが、もっと厳密に言えば、言葉によって喚起される概念（ソシュールの言うシニフィエ）なのである。プラトンのアイデアとは、この概念（シニフィエ）が頭の外に持ち出され実体化されたものである。¹²しかし、池田清彦が指摘しているように、自然科学においても、この「不変のもの」が現実の世界に存在すると錯覚されている。

外部世界に不変の実在物があるという、認識論上の錯誤には、しかし、極めて根強いものがあります。・・・・・・・・

物理学の歴史も、ある意味では外部世界に存在する不変の実在物（それはその時々によって原子とか素粒子とか呼ばれている）を探そうとする試みだったとも言えます。この試みは量子力学や素粒子論の発達に伴って破綻しつつあることが徐々に明らかになってきましたが、私の考えによれば、外部世界に不変の実在物があるという枠組が破綻するのは、あらかじめわかりきったことなのです。なぜならば、時間を内包しない外部世界の不変の実在物の存在を確かめるためには、我々が経験できる現象に頼るよりないが、現象は時間を内包するため、時間を内包しないものの実在を確かめようがないからです。¹³

現実に存在するものが全て、時間的な存在だとすれば、不変のもの、つまり変化しないもの、超時間的なものはどこにもないということにならざるを得ない。ところが、同じようにチョムスキーも不変の「分子 (molecule)」が外部世界に実在すると考えている。

..... in the nineteenth century chemists constructed abstract diagrams that were supposed to represent a complex molecule with carbon and hydrogen and oxygen attached in some fashion. it wasn't clear whether there were things corresponding to the parts of the diagram. In the early part of the twentieth century, physicists began to discover the physical entities that had the properties that had been described by the chemists. In fact, until the early part of the twentieth century, many scientists weren't convinced that there were even such things as molecules. They thought this was just an abstract idea, an abstract computational idea. In the early part of the twentieth century, evidence accumulated showing that there really are things that have these properties.¹⁴

チョムスキーは19世紀に化学者によって考え出された「分子」が20世紀になり、物理学者によってその存在が確かめられたと考えている。つまり、チョムスキーにとって、「分子」は抽象的な観念ではなく、物理的実体なのである。しかし、エルンスト・マッハが主張したように「原子」さえ、外部世界には存在しない。池田清彦はマッハを擁護して、次のように述べている。

マッハは、原子というのは仮想の産物であって実在するものではない、として原子仮説を批判しました。素朴实在論に立つ物理学者たちは、原子の实在は実証され、それと共にマッハ哲学も破綻した、と鬼の首でもとったように言います。

確かに原子の实在は実証されました。しかしそれは現象として観察可能になったにすぎないのであって、逆に不変の同一性を保つ実体としての原子はみごとに否定されました。今日の科学からみれば、原子は不変の実体などではさらさらなく、ながれゆく現象にすぎません。核物理学は原子が他の原子に変換することを実証し続けています。その意味で、外部世界に自存する不変の実体としての原子の存在を拒否したマッハの考えは、むしろ正しかったと言うべきなのです。

外部世界に不変の実在物があるとするすべての構図は、当の実在物が直接観察不能な時だけ有効な擬制にすぎないと思われれます。なぜならば観察可能なものは現象であって、現象は不変ではありえないからです。¹⁵

このように我々は時々刻々と変化している、この世界を自分の頭の中にある不変の概念によって把握している。アンリ・ベルクソンは我々の知性や感覚や知的操作や言語や科学が、変化するものを非連続的な不動のものとしてしか捉えられないことを取上げ、我々の日常的認識のメカニズムは映画的な性質のものであると述べている。

実をいえば、物体はあらゆる瞬間に形態を変えている。あるいは、むしろ、形態など存在しない。というのも、形態なるものは不動なものであるが、実在は運動だからである。実在的なものは、形態の連続的变化である。形態は、変移を撮影したスナップ写真でしかない。したがって、ここでもやはり、われわれの知覚は、実在の流動的な連続性を、いくつかの非連続的なイメージのなかに固定しようとする。¹⁶

ベルクソンにとって、この世界は流れゆく川のようなものであり、一瞬として止まることなく変化している。我々が物体だと思っているものは、実は、この変化する世界が非連続化され固定されたものに過ぎない。言語学、科学は勿論のこと、人間のあらゆる営為そのものが、このような認識構造によって成り立っていることは否定できない。従って、ソシュールが多様で混質的な言語現象から等質的な対象としてラングを抽象したことはやむを得ないことであつたと言わねばならない。そして、ソシュールはこのような事情を理解していたのではないかとも思われる。というのは、言語学の対象を規定する時、次のように述べているからである。

事物のあいだに打ち立てられるきずなは、この領域〔＝言語研究の領域〕では、事物そのものに先立っており、それらを決定するのにやくだっている。

ほかのところでは、まず事物が、与えられた対象があつて、つぎにそれを人はさまざまな視点から自由に考察することができる。

ここでは、正しいか誤っているかは問わず、まず視点があつて、しかももっぱら視点だけがあつて、その助けをかりて、ひとは二次的に事物を創り出すのである。こうした創造物は、もし出発点が正しければ現実の物〔実在〕に対応することになるし、反対のばあいには対応しないことになる。だがいずれの場合にも、いかなる事物も、いかなる対象も一瞬たりとも即自的には与えられていないのだ。¹⁷

自然科学では対象は予め与えられているが、言語学では我々はその対象を造り出すのだとソシュールは言うのである。尤も自然科学の対象も予め与えられているとは言えないということを我々は見てきた。それはともかくとして、ソシュールは言語学の対象は客観的に存在するのだとは考えていなかったのではないかとも思われる。¹⁸この意味で、ソシュールは「ラング」という言葉によって言語体系という、言語学の対象を造り上げたという

ことになるのかも知れない。時枝誠記はソシュールの方法論を批判したけれども、我々にはこの他に道がないのである。バフチンが指摘しているように、言語学の対象とされている言語体系（ラング）は人間とは独立に存在する客観的なものではなく、抽象化によって言語学者の主観的意識にのみ実在する。人間は変化しているものを概念（シニフィエ）により変化していないものとしてしか認識できないのだということを忘れてはならないのである。

注

1 このようなソシュールの考え方は『一般言語学講義』の中で散見される。その個所を引用すると次のようである。

Quel est l'objet à la fois intégral et concret de la linguistique?

La question est particulièrement difficile;

F. de Saussure, *Cours de linguistique générale* (Payot, 1916), p. 23.

Il n'y a, selon nous, qu'une solution à toutes ces difficultés: *il faut se placer de prime abord sur le terrain de la langue et la prendre pour norme de toutes les autres manifestations du langage.*

Saussure, p. 25.

La langue, distincte de la parole, est un objet qu'on peut étudier séparément. Non seulement la science de la langue peut se passer des autres éléments du langage, mais elle n'est possible que si ces autres éléments n'y son pas mêlés.

Saussure, p. 31.

Tandis que le langage est hétérogène, la langue ainsi délimitée est de nature homogène:

Saussure, p. 32.

2 ミハイル・バフチン（桑野隆訳）『マルクス主義と言語哲学』（未来社、1989）pp. 96-97. ()内は原文。

3 バフチン, p. 99.

4 時枝誠記『国語学原論』（岩波書店、1941）pp. 62-63. ()内は引用者。

5 N. Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax* (The M. I. T. Press, 1965), pp. 3-4. ()内は原文。

6 N. Chomsky, *Knowledge of Language* (Praeger, 1986), p. 16. []内は引用者。

7 N. Chomsky, *Rules and Representations* (Columbia Univ. Pr., 1980), p. 219.

[]内は引用者。

8 このような方法論は、プラトンのイデア論と酷似している。詳しくは、荒木直樹『言語論を問う』（近代文藝社、1993）所収の「プラトン主義者チョムスキー」を参照されたい。

9 N. Chomsky, *Rules and Representations*, p. 25. [] 内は引用者。

10 ヘラクレイトスは「パンタ・レイ（万物は流転する）」で有名なギリシャの哲学者である。次のような断片が残っている。

同じ河に二度はいることは出来ない。・・・・・・散らばっては、再び集まって来、
・・・・・・また近寄ってきては、去っていく。

11 プラトン（松永雄二訳）『パイドン』（岩波書店、1975）74D-E。（ ）内は引用者。

12 詳しい説明は、荒木直樹『言語論を問う』所収の「イデア・形相・普遍」を参照されたい。

13 池田清彦『構造主義科学論の冒険』（毎日新聞社、1990）p. 68。（ ）内は原文。

14 N. Chomsky, *Language and Problems of Knowledge* (The M. I. T. Press, 1988), pp. 185-186.

15 池田, pp. 139-140.

16 アンリ・ベルクソン（松浪信三郎・高橋允昭訳）『創造的進化』（白水社、1966）p. 342.

17 ソシュールの「手稿9」。立川健二『《力》の思想家ソシュール』（書肆風の薔薇、1986）pp. 51-52。[] 内は原文。

18 立川健二によれば、ソシュールにとって言語とはなによりもまず生成・変化の流れであるという。立川, pp. 138-139. を参照されたい。